

## 牧 師 所 感 ： 韓国大邱市・諸教会 合同復活礼拝

— 1963 年 4 月、啓明大学 露天劇場 —

キリスト者は過ぎる 3 月 5 日～4 月 17 日までの期日を四旬節と名付けて、主イエス・キリストが人々の救いの為に、自らが受難された期間を称する。その期間の内には、特にキリストの受難の意味を深く考え、そのキリストの愛に答えるべく謙虚で感謝の日々を送ってくれることを望む日でもある。

ところで四旬節の最後の一週間は、主イエスの受難と死、そして復活を喜ぶ一週間である。

さて筆者はこどもの時から今日まで、主イエスの苦難の季節には教会が教える通り、克己の生活を営んで来たことを思い出す。キリストが私の罪を赦す為に“死んでくれた”というつぶらの信仰でイースターを待っていたことを記憶する。ところが成人してからは、こどもの時のあのつぶらな信仰が後退している自分を発見する。

とは言え、キリスト者である以上、主イエスの受難と死、そして御復活を軽々しく送るべきではない、という反省が、主の復活節には強く胸に迫ってきたことを告白しよう。

ところで筆者が音楽大学 3 年生の時、韓国の母校啓明大学では校庭（大学は山を切り開いて建てられた）の岡を切り開いて 1,800 人が座る露天劇場を太陽に向けて建立した。時は 1963 年 4 月、復活節の日に、超教派、諸教会の信徒達を迎えてイースター礼拝をお捧げすることになった。その時の筆者は音楽大学 声楽科 3 年生であった。ところで露天劇場では大群衆が礼拝の始まるのを待っていた。やがて太陽が昇るや礼拝は開始された。と共にラッパ手と独唱者がヘンデルのメサイヤ曲の 47 番と 48 番の曲を演奏した。タンタターン、タンタターンの伴奏により、私は The trumpet shall sound と歌った。最後まで歌い、大邱全市民のクリスチャン家庭まで届いたと聞く。その時より筆者の信仰はよみがえった。ところで日本ではそういう経験はない。でも各教会で主の御復活を喜ぶに違いはない。ハレルヤ！！

